

コロナの拡大が止まりません。昨年の感染者数は約23万人、死者は3500人にも上りました。一方、2018年のインフルエンザによる死者数は3325人と、コロナと肩を並べます。今年の冬は、インフルの流行が平年よりずっと少なく、2020年の死亡者総数は、コロナによる死亡をふくめても、平年と比べて増えているわけではありません。

コロナとインフルの同時流行が起こらないことはこの連載でも、近著「コロナとがん リスクが見えない日本人」（海竜社）でも指摘してきました。オーストラリアなど、南半球の冬（20年7〜8月）にはほとんど感染者が出ていな

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

がん検診は「不要不急」じゃない

現実には、向こう20年間はがん患者数の増加が予想されていますから、この「減少」は「検査の自粛」による見かけのものにすぎません。

この連載でも何度もお伝えしてきたように、よほど進行しないかぎり、がんは症状を出しにくい病気です。多くの人の体内で、検診を受けていれば早期に見つかったはずの

がんの早期発見・早期治療は時間の概念を持つ人間ならではのと言える行為です。

私も2年ほど前に無症状の膀胱（ぼうこう）がんを「自己超音波検査」で早期に発見しました。症状は皆無だったわけですが、切除後はしぶん、痛みに苦しみました。1時の痛みと引き換えに未来の時間を手に入れたと言えます。

かったことから、予想されたことでした。マスク、手洗などの感染症対策が効いたのですが、逆にコロナの感染

力の強さを証明した形です。一方、今、がん患者が大幅

に「減少」しています。例えば、20年4〜10月の東大病院での胃がんの外科手術は19年の同じ期間より43%も減って

います。胃がん以外のがんでも、減少傾向が明らかです。

がんが放置され、今後、1〜2年かけて進行がんに成長していくことになります。

今、症状がないといっても、がん検診は「不要不急」のものではありません。そもそも、

幸せな長寿を手にするにはがんの壁を乗り越える必要があります。しかし、今、「人生100年」がコロナの前にかすんで見えます。そして、これは日本だけの問題ではありません。次回もこのテーマを続けます。

（東京大学病院准教授）